



卷頭言

北野, 耕平

(Citation)

海事資料館研究年報, 21

(Issue Date)

1993

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005662>



巻 頭 言

海事資料館長 北野耕平

“人が動く前に物が動いた”という感想を日本航路図のパネルを計画していて思いました。もちろん、数万年前の旧石器時代の小規模な居住から、縄文、弥生時代以降の集落の中で、文化は人によって伝えられ、歴史は形成されてきました。

しかし江戸時代後半の西廻海運、東廻海運をはじめ、沿岸諸地域が弁才船などによって結ばれた状況を描いていくと、幕藩体制が物流経済の発達によって革新へと向かった過程がよく分かります。坂本龍馬の「いろは丸」はその先端に位置する好例といえます。

アジアの中で日本の近代化がいち早く進んだ理由として、鉄道敷設以前の海運の繁栄と、経済の活性化が原動力の一つとして挙げられるでしょう。上方と江戸を軸として、北海道から九州まで網の目のように産物を流通させていた実態こそが当時の海運だったのです。

最近、木村尚三郎氏はマスコミ紙上で、日本の空間感覚・コミュニケーション感覚を外に向かって広げることの必要性を指摘しました。情報化社会の現代においては世界の枠は拡大し、人種・国境といった概念を乗り越える段階が来ています。かつて鎖国体制下の日本が、船往來手形をもつ海運の発達によって近代化の緒を得たことを、現在の国際社会の交流、拡大という新しい次元での参考としたいと思います。